

殺人事件

西村
京太郎

長編推理小説

神話列車



KOBUNSHA BUNKO
光文社文庫



光文社文庫

長編推理小説

神話列車殺人事件

著者 にしむらきょうたろう 西村京太郎

1987年12月20日 初版 1刷発行

1992年 7月10日 29刷発行

発行者 大 坪 昌 夫

印刷 凸 版 印 刷

製本 明 泉 堂 製 本

発行所 株式会社 光 文 社

〒112 東京都文京区音羽2-12-13

電話 東京 03(3942)2241(代表)

振替 東京 6-115347

© Kyōtarō Nishimura 1987

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-70653-3 Printed in Japan

光文社文庫

江苏工业学院图书馆

長編推理小説

補註
藏書
事件
草

西村京太郎



目次

第一章 高千穂^{たかちほ}への旅

5

第二章 出雲^{いずも}への旅

40

第三章 追跡

76

第四章 死者の声

110

第五章 九州へ

145

第六章 神々の祝宴

180

第七章 蘇^{よみがえ}る神話

217

第八章 逆回転

252

第九章 穴道^{しんじこ}湖

287

第十章 新たな旅立ち

322

解説

山前^{やままえ}讓^{ゆずる}

357

第一章 高千穂^{たかちほ}への旅

1

日高^{ひだか}健介^{けんすけ}は、延岡^{のべおか}から、高千穂線に乗ったあとも、まだ、なぜ、妻の亜木子^{あきこ}が、新婚旅行の地として、高千穂を選んだのか、わからずにいた。

日高は、三十二歳。再婚である。

東京のある私立探偵社に勤めていた。アメリカの私立探偵というのは、拳銃片手に、さっそうと、事件解決に当たるが、日本の場合は、拳銃も、免許証も持っていない。

日本にも、立派な探偵社があるのだろうか、日高の働く太陽探偵社は、インテリヤクザの集まりだった。

サラリーマンとして、失格した連中が、「幹部職員への道あり」とか、「月収五十万円確実」といった新聞広告を見て、集まって来ていた。

両方とも、嘘であった。

刑事あがりの社長が一人いて、その他は、全員、ただの調査員である。幹部などいないのだ。それに、月収五十万円というのも、あやふやだった。

太陽探偵社には、基本給がなく、すべて、歩合制だった。

一件の調査について、会社が八十パーセント。調査員は二十パーセントをとる。一見すると、有利なようだが、一件十万円の調査をやるとすると、調査員は、二万円しかもらえないのである。

二十万円の月収を得ようとすれば、一件十万円の調査を、一カ月に十件やらなければならぬ。一件あたり、わずか三日間である。

良心的にやろうと思えば、一週間も、二週間もかかるが、それでは、生活ができないのだ。自然に、ずさんな調査になってくる。

それに堪えられない者は、どんどん辞めていったが、社長の広田は、補充はいくらでもつく、と、強気だった。

二十代なら、いくらでも有利な仕事があるが、三十代を過ぎると、今の日本ではとたんに、仕事がなくなってしまう。

新聞の求人欄を見れば、一目瞭然である。

特殊技能でもあれば別だが、三十歳過ぎのインテリというのは、本当に、使い道がないのだ。トラックの運転手のような力仕事や、セールの仕事なら、いくらでもあるが、どちらも、腕力のない、社交性の乏しい人間にはむいていない。

だから、広田は強気で、少しでも、待遇の改善を要求したり、基本給の支給をいう調査員は、容赦なく、馘ひにした。

日高も、挫折して、太陽探偵社に入った一人だった。

一流大学の英文科を出た日高は、大手のM商事に入社した。前途は、洋々としているように見えた。

二十六歳で、結婚した。大学時代のクラスメートで、K銀行の重役の娘だった。多少わがままなどころはあるが、美人で、頭がよかった。

万事がうまくいっていたのだ。それが、二十八歳の時、突然、挫折がやって来た。

新宿で飲み、ちよつと美人のホステスを、自分の車で送ってやろうとしたのが、いけなかった。

事故を起こしたのである。日高自身は、軽傷ですんだが、助手席に乗せていたホステスは、三カ月の重傷だった。

その治療費などは、払ったが、日高は、警察に逮捕され書類送検された。

M商事は、もちろん、馘ひになり、気位ぐゐの高い妻は、ホステスを乗せていたことが許せない、と、さっさと離婚してしまった。

そのあと、日高は、さまざまな職についた。

三十歳までは、事務の仕事もあったが、給料が安く、前途に光明がもてずやめてしまった。そして、三十歳を過ぎると、そんな事務の仕事も無くなった。

三十一歳の時、新聞で見た太陽探偵社に入ったのである。

2

最初は、良心的にやろうとした。依頼主は、一生を左右することだからこそ、調査を頼みにくるのである。それを考えれば、いい加減な調査はできないと思ったからである。

しかし、それでは、食べていけないことを、すぐ、さとらされた。先輩の調査員は、馬鹿だといった。

半年もすると、次第に、ずるくなり、良心も、麻痺してきた。ちょっと調べて、適当な報告書を作りあげること覚えた。

「お前さんも、一人前になったよ」

と、先輩がいった。

一度に、三つも、四つも、調査を抱えて、歩き回ることも、平気でやるようになった。

太陽探偵社には、調査員が二十五人いた。

このほかに、窓口には、女子社員が三人。客は、窓口で、調査依頼書に記入し、料金を払う。日高たち調査員は、直接、客に会うことは禁じられていて、窓口の女子社員から、仕事をもらうのである。

社長の広田は、調査員を、調査に専念させるためといっているが、これは、明らかに嘘だっ

た。

調査員が、会社に内緒で、勝手に、調査依頼を引き受けると、会社の利益は、ゼロである。それを防ぐためののだ。

それでも、八十パーセントも、会社にとられるのが癪で、自分で、仕事をとって来て、いわゆるアルバイトをする調査員がいた。わかれば、即、誅である。

窓口の三人の女子社員の中に、湯村亜木子がいた。

年齢は二十七歳になっていたが、なぜ、こんな美人が、こんな会社と思うほど、色白の美人で、スタイルも良かった。

ただ、無口で暗い感じだった。

朝の出勤の電車の中で、日高は、偶然、亜木子と一緒にになり、それから、口をきくようになった。

亜木子は、自分のことを、話しながらなかった。日高も、あえて、きくこともしなかった。日高自身、自分を、挫折した人間と思い、過去を、あれこれ、詮索されるのが、嫌だったからである。

辛うじて、亜木子が話してくれたのは、九州の福岡の生まれだということと、両親と兄は、すでに死亡し、遠い親戚はあっても、天涯孤独と同じだということだった。

日高は、彼女の美しさと、彼女に、係累のことが気に入った。

家族がいれば、日高の過去を、あれこれ、聞こうとするに決まっていたからである。

つき合い始めて、八カ月後に、日高が求婚し、亜木子は承知した。

亜木子は、自分の要求というものを、めったに出さない女だった。が、新婚旅行のことになったとき、

「高千穂に行きたい」

と、初めて、自分の希望をいった。

三泊四日の旅行を予定していた日高は、グアムか、サイパンあたりを、亜木子が希望するだろうと思ったのだが、高千穂というのは、意外だった。

「なぜ、高千穂に行きたいの？」

と、聞いてみたが、亜木子は、ただ、微笑しただけである。

日高は、彼女の郷里が福岡だから、子供の頃、高千穂へ遊びに行ったことでもあり、それがなつかしいのだろうと、勝手に解釈した。

日高の高千穂についての知識といえば、天孫降臨の神話の土地ということだけだった。

九月七日に、東京都内の神社で、ささやかな結婚式をあげ、羽田から、全日空機で、宮崎へ飛び、宮崎から、日豊本線で、延岡へ出た。

その日、延岡駅前のホテルで一泊し、翌、九月八日、国鉄高千穂線に乗ったのである。

高千穂線は、延岡から、高千穂までの五十一キロを走る典型的な赤字ローカル線である。

このままでは、昭和六十年に、廃線になるというので、地元で、反対運動が起きている最中だった。

乗車率を高くするために、高千穂の町が、十人以上の団体利用に、運賃の半分を補助していると聞いたが、それでも、車内は、がらがらだった。

まだ、電化されていないので、気動車である。

朝夕は、五両連結だが、日高たちが乗った時は、三両連結だった。

赤色に塗られた三両連結の列車は、ディーゼル・カー特有の、ぷーんというエンジン音を立てた。一〇時三一分、延岡駅を発車した。

終点、高千穂駅まで、一時間四十六分の旅である。

車内にエア・コンなどはなく、日高はかたい座席に亜木子と並んで腰を下ろすと、窓を開けた。

陽差しは、強かったが、窓から入ってくる風は、涼しく、秋の気配を感じさせた。

亜木子の様子は、なんとなくおかしかった。

延岡のホテルからである。妙に、陽気にはしゃいでいたかと思うと、急に黙り込んで考え込んでしまうのである。

高千穂線に、乗ってからと同じだった。

高千穂線は、山あいを、五ヶ瀬川の溪流沿いに走る。

杉木立ちや、畠や、五ヶ瀬川の川面が、車窓に広がって美しい。

亜木子は、子供のようにはしゃいで、「素晴らしい景色ね」と、いかと思うと、開けた窓にもたれるようにして、じっと、考え込んでしまったりする。

子供の頃の思い出を求めて、高千穂へ来たかったのだろうという日高の推測は、改めざるを得なかった。

（もっと、大きな何かが、高千穂にあるらしい）

と、思った。が、それが何なのか見当がつかない。

高千穂へ着けば、わかるだろうと思い、日高は、黙っていた。延岡と高千穂の間には、十七の駅があるが、ほとんど無人駅である。

そうした小さな無人駅を、いくつか過ぎる頃から、次第に、山が深くなっていた。

五ヶ瀬川と、国道二一八号が、高千穂線の線路を中心に、右に左に、蛇行だうこうしているのが、眼下に見える。

日高は、亜木子が黙っているのを、仕方なく、煙草に火をつけた。

二人の乗っている車両には、土地の人らしい家族連れが二組と、観光客に見える若い女性の三人グループ、それしか乗っていない。

列車は、ごとごとと、走り続けている。

一日往復十六便しかないので、線路の中にまで、雑草が生えている。

山腹の無人駅に着く。まるで、今にも、谷底に落ちそうなプラットホームである。道路は、

三、四十メートルも下を走っている。ここで降りた乗客は、そこまで降りて行くのだろうか。駅の周辺には、家は一軒もなく、道路沿いに、四、五軒あるだけだからである。

高千穂までに、二つ有人駅があつて、単線の高千穂線は、そこで、上り、下りが、すれ違う。左右の山が高いので、一日に、陽の当たる時間が、六時間しかないことから名付けられたという日ノ影駅に、五分間ほど停車したあと、列車は、さらに登っていく。

あと、影待、深角、天岩戸と、いかにも、神話の地にふさわしい名前の無人駅が続いたあと、終点の高千穂駅に着く。

「間もなくだよ」

と、日高は、亜木子に声をかけた。

「ええ」

と、亜木子は肯いてから、急に、立ち上がって、

「ちょっと」

と、いった。

トイレに行くのだなと、察して、日高は、腰を浮かし、亜木子を通した。

亜木子が、うしろの車両に消えるのを見送ってから、日高は、また、車窓に眼を戻した。

トンネルを一つ、二つと通り抜けたあと、今度は、五ヶ瀬川の支流、岩戸川にかかる高千穂鉄橋を渡る。

高さ百五メートル、長さ三百五十四メートルの鉄橋である。眼も眩む高さである。

（高所恐怖症の亜木子は、どうしているだろうか？）

と、座席から立ち上がって、うしろを見たが、彼女は、まだ、戻って来ていなかった。

（トイレにしては、少し長過ぎるな）

と、思い、急に心配になってきた。

昨夜から、なんとなく態度がおかしかったのは、精神的なものと思っていたが、あるいは、身体の調子が悪くて、それを日高に負担をかけまいとして、黙っていたのかもしれない。

列車は、トンネルに入った。

高天原たかまがはらの下を通るトンネルである。このトンネルを抜けると、すぐ、終点、高千穂駅に着く。家族連れや、若い女性三人の観光客は、立ち上がって、ドアのほうへ歩きだした。それなのに、まだ、亜木子が、戻ってこない。

日高は、最後尾の車両についているトイレまで歩いて行った。

三両連結のこの列車に、トイレは、最後尾の車両だけである。トイレのドアは閉まっていたが、「アキ」になっている。

日高が、開けてみると、中には、誰もいなかった。

日高は、当惑し、狼狽ろうばいした。

（亜木子が、いなくなった）

わかったのはそれだけだった。いったい、どこへ行ってしまったのだろうか？

日高が、戸惑っているうちに、列車は、終着高千穂駅に着いた。

他の乗客は、どんどん降りて行く。

日高も、自分の席に引き返し、網棚から、彼のと、亜木子のと二つのスーツケースを降ろした。

まだ、亜木子が、どこから戻ってくるのを、日高は、待っていたが、三両の乗客が、すべて降りてしまっても、彼女は、戻ってこなかった。

車掌が、忘れ物はないかと、網棚を見ながら歩いて来た。

「どうなさいました？」

と、日高に聞いた。

「実は、僕の連れがいなくなってしまうて——」

4

日高は、真剣だった。が、彼のいったことは、若い車掌には、滑稽に聞こえたのかもしれない。

確かに連れの女に逃げられた男というのは、他人から見れば、滑稽に見えるだろう。

車掌は、笑いかけてから、それが、不謹慎だと気づいたらしく、あわてて、生真面目な顔になつて、

「どういなくなつたんですか？」